

暁光会の歴史

詫摩 良

ゼロからの出発

あかつき特別養護老人ホームの由来をご存知でしょうか。

今から五十五年ばかり前のこと、神戸の一番貧しいと言われている通称「新川」（新生田川の略）に一人のフランス人の神父が住み着きました。

普通、神父さんは、教会において毎日ミサ（祭りごと）をたて、日曜日には、大勢の信者さんが集まってミサにあずかる（参加する）。その中でお説教をします。

ところが、神父さんは、その教会を持たずに、バラック建ての二畳一間のアパートに住み、そこに住んでいる人と同じような服装をし、同じものを食べ、彼らと全く同じ生活を始めたのです。

何故、そんなことをするのでしょうか？

キリストは「貧しい人の中にこそ私はいる」とおっしゃっているからです。

そして、その人たちの幸せのためには、何が必要なのか？何をすればいいのか？を共に生活しながら探していこうとしたのです。

その頃の神戸は、まだ焼け跡が多く残っており、そこが、よく見えませんでした。

国鉄（今のJR）阪神・阪急三宮駅から東へ歩いて十分の所に住んでいた神父さんは、何処に行くにも、帰ってくるにも、三ノ宮駅を利用していました。

夕方になるとかなりの人がJR三宮駅の南側斜面に集まって来て、ぶらぶら、ごろごろしています。毎日通るので顔なじみの人もできました。そして、ある時、不思議に思っていたことを彼らに質問してみました。

「何故、あなた達は、夕方、この三宮駅前に来るのですか。」

「戦争から帰って来たら家族は空襲で皆死んでしまった。家も焼けてもて住む所なんかあらへん。」

「復員して来たけど、家族は何処かへ疎開したらしいけど、何処の行き先かもわからん。」

「田舎では、仕事が無くて、都会へ出て来たら、何か仕事につけるかと思って出て来てみたが、なかなか思うようには行かん。」

「九州から東京へ行こうと出て来たけれど、あつちで一ヶ月、こつちで二ヶ月、働きながら旅をしているんや」等々、答はいろいろでしたが、共通していることは、住む家が無いということと毎日決まった仕事が無いということでした。

そこで神父さんは考えました。たとえばバラック二畳一間のアパートに住んでいて、貧しくても、いざという時は、近所の人が援けの手を差し伸べてくれるし、家族もある。法の保護を受けることもできる。

しかし、この人達には、家族も無く仕事も不安定だ。此の儘、放っておけば、浮浪者になってしまうかも知れない。よし、

この人達のために、是非住む家を作ろう。毎日働くことのできる仕事も考えよう。

住むところと仕事の無い人達のために、何かをしよう。と決心したバード神父は、フランスで貧しい人達のために、一生懸命働いておられるピエール



神父に手紙を書きました。

「日本にも家と仕事の無い人が沢山います。この人達に、先ず住むところを作る計画を立てていますが、収入は多くなくても安定した仕事を探しています。何をしたら良いでしょうか？」

折り返し返事が来ました。「バタ屋が宜しい。人の捨てたものを拾えば良いのもどで(資金)も技術もありません。」

なるほど捨ててある物、空き缶、折れ釘、新聞、雑誌、包装紙、ボール紙、段ボール等々、夜になると商店街の軒先には、沢山の屑が捨ててあります。これを拾って、缶は缶、瓶は瓶、紙は紙というふう纏めて、其々の問屋に持って行って買って貰うのです。

しかも自分が努力すればする程、収入が増えるのです。という訳で仕事が決まりました。

しかし、仕事をするためにも住むところを作るためにも土地が要ります。

そこで早速、土地探しが始まりました。幸いにも直ぐ近くにお寺の焼け跡百二十坪がありました。三宮から歩いて十分、国道二号線の直ぐ山側です。今は、韓国の方が持つておられるとのこと、早速、訪ねて事情を説明し土地を譲って下さいと頼みました。

その方は、大変感激し「何年前か前迄は、敵国だった日本の人のために、よくそこまで考えてあげました

ね。」と気持良く譲って下さいました。

しかしバロード神父には、お金は一円もありません。そこで今度は、神父の属しているパリ外国宣教会に事情を話して土地代を出して貰うことになりました。

さて今度は家の建築です。知り合いの建築屋さんに頼んで、家を取り壊した時に出る古い材料をできるだけ使うことにし「ある時払いの催促無し」でできるだけ早く建てて貰うことにしました。

近くの教会の青年達も勤めの帰りによつては、自分達のできることを手伝いました。

この間にバロード神父は東京の蟻の会（外地から引揚げて来た人達が隅田公園の一角に住み、助け合いながら生活をしている集団。仕事はバタ屋でした。）にバタ屋の修業に行き、一人前になるのに三ヶ月かかるころを二週間で許しを貰って帰って来ました。

蟻の会では、貧しい仲間のために働いて下さるバロード神父を応援するために寄せ屋（バタ屋さんが拾って来た物を買って、紙、鉄屑、瓶等それぞれの問屋へ売る）のできるお父さん、教会、学校、病院、修道院等から纏めて屑を集めて回るため運転ができるお兄さん、皆のために食事を作ってくれるお母さん、妹、弟の五人家族が東京から引越して来ることになりました。

家ができた

寒くならない内にと言う皆の気持ちが一つになって、十月半ばに家が出来上がりました。

一階はコンクリート床の作業場、二階は廊下を挟んで両側に五つづつの十室、屋根裏部屋三つの計十三室です。

お布団は、住吉教会の婦人会が材料を持ち寄って作って下さいました。毛布は神父が、そごう百貨店の隣にあるアメリカ軍のキャンプへ行き「使っていない毛布があるなら下さい」と沢山貰って来ました。

さあ三宮駅前の人達に知らせて温かい部屋で寝て貰おう。

寒くならない内に新しくできた家に来て貰おうと、神父さんは、早速三宮駅前の、お馴染みになった人達に声をかけました。「あなた達の住む所ができました。仕事もあります。食事も易く食べることができます。どうぞ、いらつしやい」

ところが誰も来ないのです。余り話が旨過ぎて信用できないと言う訳です。

住人が来た

その内、九州の小倉から出て来た奥村さんと言う人

が「よし俺が行って見て来るけん。本当じゃったら呼びに来る」と試しにやって来ました。来て見るとみんな本当だったのです。

早速、仲間達に知らせると十七人も人がいっぺんにやって来ました。

食事の世話をするお母さんは、大忙しのてんでこ無い。食卓も無かったので小さい丸いテーブルに古い雨戸を乗せて、急ごしらえの食卓とし、四人づつ交替で食事するありさま。

私も勤務が終わったら駆け付けて、お井を洗ったり、ご飯をついだり、忙しい中にも和気あいあいの内に愉しく働きました。

クリスマス



十二月二十四日はクリスマスです。一階倉庫を片付け、みかん箱を二つ重ね、シーツを掛けて祭壇としコンクリートの床にむしろを引いて、皆、座りました。

裸電球とローソクの灯のゆらめく

中で厳かなご降誕のミサが始まり、私は、どんな立派な教会のミサより素晴らしいクリスマスだったと、今も思っています。

ミサが終わったら楽しい食事です。カレーと食パンだけの粗末な食事でしたが、皆、感謝し頂き、デザートはおぜんざいでした。これも今までの内で一番美味しかったような気がします。

食事が終わると今度は隠し芸大会です。ギターを弾く人、歌う人、踊る人。物は豊かに無くとも、楽しいクリスマスでした。

お正月

次は、お正月です。三十日には、お餅つきをしました。何処から都合してきたのか、臼も杵も、ちゃんと揃い、若い人が杵を振り、年取った人が上手にこねます。つき終ると、つき立てのお餅を皆で食べて、心からの満足を味わいました。

三十一日には、バラード神父も私達、日曜学校の子供達もバタ車を引いて町に出かけました。

物を拾うと言う行為には抵抗がありました。それはほんの十分程で、今度は、各家庭のゴミ箱を開けて、どんなものが入っているのか、紙は大きい方が良くないと夢中で屑拾いをしました。

バラード神父の収入は、一番年取って収入の少なかつた人へ、私達の収入は、日曜学校の費用のために取っておくことにしました。

さてお正月も三が日を過ぎると平常通りの生活が始まります。皆、希望と喜びに満たされて働きに出かけました。

年を取ったらどうしよう

こうしてかなりの月日が経ったある日、当時七十四歳だった木谷さんと言う人が、ふと気がついて、こんなことを言いました。

「今は元気で働いているから良いけど、年をとって働けなくなったら、どうしよう」

当時、寄せ屋の親方は、自分のところで使っているバタやさんが病気をしたり、年をとって働きが鈍くなると情け容赦も無く、ポンと掘り出してしまうのでした。

この暁光会もそうだったらどうしよう。誰もがそう思うと急に不安になりました。

そのことは早速、バラード神父の耳に入りました。

老人ホームを建てます

神父は「わかりました。皆さんが老後の心配をしなくても良いように老人ホームを作りましょう」とキツパリと言いました。

でも何処にそんなお金があるのでしょうか。私は心配でした。

さて、老人ホームを作るには広い土地が要ります。あちらこちら探しましたけれど、神戸はもう土地の値段が上がってしまったって、手が出そうにありません。

箕面の土地を買う

その時、箕面に六千坪の土地がとても安く売りに出ていると言う話が舞い込みました。

それ！とばかりバラード神父と吉田さん（東京の蟻の街から来て下さった方）が、箕面へ見に行きました。

箕面駅から歩いて約四十分、道は里道と言って道幅は一メートルもありません。六千坪といっても平らな土地ではなく、山あり谷あり、大きな石ころや木の根っこがごろごろしています。ちよつと考えなければ、すぐには決断はつきません。

神戸から電車に乗って二回も乗り換えて行かねばなりませんし、歩くのも半分坂道です。

でも、日当たりの良い斜面があつて、元気な人がそこへ野菜や果物を植えて、その世話をすれば健康に良いし、楽しみもあるし、新しい野菜やもぎたての果物が食べられるのは、良いじゃないですかと言う意見もあつて、又々借金の大山を背負つて土地を買いました。それからバラード神父の箕面通いが始まりしました。野菜や果物もさることながら、老人ホームを作らねばなりません。鍬やシャベルをふるつて石や木の根っこを取り除く作業が始まりました。とても人間の力ではできないということがわかりました。



又々借金でブルドーザーの力を借りました。

バラード神父は毎日、日が暮れると必ず手や足に切り傷やかすり傷を

作つて、疲れた顔をして帰つてこられました。今のホームの玄関前のロータリーや美しい花々の咲く築山など夢のようです。

老人ホームができた

そして、やっと現在の職員宿舎になっている建物（一回が御聖堂、集会室、厨房、食堂、二階がご老人の部屋、三階がそのご老人のお世話をするシスター達の住居）ができました。

今から五十年前程前、昭和三十六年のことです。

皆さんも覚えていらつしやるでしょうが、シスター高橋が、まだ若くて本当に可愛らしいシスターでした。

バラード神父は、日本に来て、まだ月日が経っていませんだったので、お知り合いが少なく、たまたま京都に本部のあるヌヴェール愛徳修道女会修道院の院長様がフランスの方だったので、ご老人のお世話をして下さいと、お願いに行かれたのでした。

院長様は、快く引き受けて下さり、早速、大勢のシスター達が箕面へ来て下さったのでした。

狭かった道は、箕面市の仲介で両側の地主さん達が無料で貸して下さいになり、車が一台通ることのできる幅まで広げることができました。

未舗装なので一度雨が降れば、深い溝ができ、直しても直しても、何時も何処かが危ないような道でした。



老人ホーム入所第一号

さて入所第一号は、この老人ホームを作るきっかけのなった発言をした神戸暁光会のメンバー木谷さん

でした。小柄な飄々とした方で、どういいうわけか知りませんが「船長さん」と言うあだ名の方でした。

大小七つあった部屋は、暁光会の方達ばかりでなく、主に教会関係の方達だったと思うのですが、すぐ一杯になってしまいました。

六月一日、開所披露の日です。大勢のお客様をお迎えして、私は厨房でお食事作りに追われていて、御ミサがあつたのか、なかつたのか覚えていないのです。兎に角、小さいながらも老人ホームができたのです。一生懸命働いて来た人達が安心して老後を過ごすところができたのですから、皆、ニコニコ顔でした。

さて老人ホームは、たちまちの内に満員となりましたが、入所希望者は増えるばかり。おまけに寝たきりの方も、是非お世話してほしいと言う声が高まって来ました。老人ホームに入っている方達も、いづれは身体が不自由になって行きます。

北原病院誕生

そこで五年後の昭和四十一年に、現在のデイサービスのある所に二階建て、ベット数十ばかりの北原病院ができました。

この北原病院と言うのは、良家の子女でありながら、全てを捨てて蟻の会で苦しむ人達と共に生活し、その



生涯を捧げられた【蟻の町のマリア】と言われている北原さんのお名前を頂いたものです。

バラード神父は、蟻の会でのバタヤ

修業時代に、北原怜子さんの生き方に強い感銘を受け、大変尊敬しておられました。

今もあかつきの玄関の前方にある御聖堂の中に、蟻の会での北原さんの写真が十枚ほど掛かっていますので、機会があれば是非ご覧になって下さい。

北原病院もあつという間に一杯になりました。シスター達の行き届いたお世話で、いつも清潔で静かで周りには緑が一杯。お部屋の中まで緑が映えて申し分の無い環境でした。

老人ホームと北原病院は向かい合って立っており、どちらもシスター始め、寮母さん達のお世話により、ご老人達は平和な日々を過ごしておられました。

果物、花、木々

創立当時に植えたみかん、八朔、夏みかん、はたん杏、(杏に似た少し堅い目の果肉)、柿、栗等が生長し、其々の季節には枝もたわわに実って食べきれない程でした。

特にみかんは小粒ながら味も良く昔ながらのみかんだと評判になりました。毎年十一月の下旬に神戸三宮で行われるバザーで売り出したところ、あつと言う間に売り切れて大人気でした。

これだけの果物を、このように立派な実を結ぶ迄にお世話をして下さった方は、今、デイサービスで働いておられる向井さんのご両親でした。果物だけでなく野菜もいろいろ作って、朝早くから夜遅くまで、日曜祭日を問わずホームのいろいろなお仕事他に、献身的な働きをして下さいました。

残念なことに、お父様は、三十七年前に亡くなられました。これ程迄に良くお世話をして下さる方がいなくなつて、果物もだんだん元気がなくなり、現在は、柿、栗、みかん、八朔のみとなりさびしい限りです。

又、東南の斜面にある竹林には、四月の末から筍がニョキニョキと頭を出し、皆さん筍ご飯、筍の木の芽和え、若竹汁等召し上がったことと思います。

又、木の根や石ころだらけだった広い土地も次々に

整備され、あちこちに木や花が植えられて、だんだんと庭らしくなっていくようになりました。松、杉、楓、椿、樅、椈、支那さわくるみ、榎、ねむの木、棕櫚、にせアカシア、さるすべり、つくし、くちなし、山茶花、水仙、霧島等々。特に下の運動場の桜は見事で、春のお花見が待たれます。

緑は得る木々に囲まれて、ホームの毎日は過ぎていきます。と言つても寮母さん始め職員の方々のご苦労は大変なものです。

縁の下の力持ちの厨房

とりわけ厨房は、縁の下の力持ちで、皆さんの目に触れませんが、地下の厨房で大奮闘です。普通食、刻み食、流動食等を別々に調子しなければなりません。それにおやつがあります。

お正月、お誕生会、節分、ひな祭り、お花見、春の行事、端午の節句、創立記念日、七夕祭り、納涼祭、敬老会、運動会、秋の行事、クリスマス、お餅つき等々。特別料理がある度に、てんてこ舞いです。今は、野津さんを初め、皆さんがお手伝いに行かれますが、その頃は、みだりに厨房に入らないことになっていましたので、お手伝いなしでさぞ大変だったでしょうと、今更ながら感謝の気持で一杯です。

ホームと北原病院と二つの建物を廊下で繋いで名称は違いますが、していることは同じご老人のお世話です。役所に提出する書類も二通り出さなければいけませんし、箕面市からのお話もあり、思い切って二つを一つに統合し特別養護老人ホームとして出発することになりました。

あかつき特別養護老人ホーム開設

昭和四十五年、丁度万博の年、現在の建物が出来上がり、あかつき特別養護老人ホームとして六月一日、スタート致しました。定員五十名です。

皆さんお馴染みの潇洒な建物(ホテルと間違えて泊めて貰えますか?と言われた方もあった由)。日当たりの良い南向きのテラスがあり、東西に長く伸びた、丁度、大きな鳥が羽を広げたような段差の無い本館。外から見たら、おや何だろうと思う円筒型の医務室。少し経ってから円形テラスができました。ここからの眺めの良いこと。夜は街の光がチラチラと瞬いて、少しロマンチックな気分になりますね。

このように少しづついろいろな物が加わって現在の体裁が整って来ました。

さて、特別養護老人ホームとして出発した「あかつき」は、何時も満員です。おまけにホームに入るため



に待つておられる方達は、増える一方です。

事業拡大

そこで昭和五十年に定員を五十から七十に増やしました。

お家で介護を受けておられるご老人を短期間お預かりするショートステイ事業も、昭和五十五年から始まりました。

ご老人は住みなれた我が家でお過ごしになられるのが一番ですが、お世話をなさる方のご苦労は大変なものです。食事、入浴、トイレ介助、おむつ交換、洗濯等々。お世話をなさる方は、年を召された配偶者か息子のお嫁さん、娘さん等さまざまですが、本当に良くなさいますねと、頭を下げたくなります。

「あかつき」も老人福祉の先駆けとして、箕面市からのお話でデイサービス事業も行うことになりました。北原病院跡に、地下を車庫、倉庫、機械室、二階がデイサービス、三階は、本館から廊下で繋いでホームが広く使えるようになりました。此処の往來は、車椅子四台入るエレベーターが活躍しています。この渡り廊下から見る夕空はとても広く美しく、いつも立つて眺めてしまう程です。

事業は、どんどん広がりに、昭和六十二年には、ショートステイは六床に。平成三年四月には、在宅サービス供給ステーションとして、介護支援センター（二十四時間対応）、ホームヘルパー派遣事業も開始されました。又、平成四年には、障害者ショートステイも始まり、皆、大忙しのきりきり舞いですが、福祉の第一線で働く者の自覚と誇りに職場は、活気が溢れているように思えます。

そして今、尚、増え続けるご老人の為に、何をどのようにすれば良いかを、常に考えながら職員の皆さん

は、一生懸命に頑張っておられます。

大変大雑把な文章で申し訳ありませんでしたが、これで「あかつき」のお話を終わります。皆様のご健康とより良い毎日を心より願って筆を置きます。どうも有り難うございました。

補足

この文章は、あかつき広報誌に平成八年春の四号から平成十一年夏の十六号までの十二回の連載で書いて頂いたものです。

詫摩良さんと私は、平成六年からのお付き合いですが、心の綺麗な方で何時も、他の人のことを思い、働き続けられました。

若い時からバラード神父を献身的に助けておられました。が、詫摩さんがあかつき特別養護老人ホームを退職後、しばらくして、その関係は、残念ながら破れました。

詫摩さんの人生の長い部分は、暁光会と共に有ったように思います。詫摩さんにとって其れは、どんなに悲しい結末であったかと察します。

暁光会にとって彼女は、恩人の一人であったと思います。

平成十五年十月十八日と同十八年四月二日の二回、脳内出血を発症されました。

今は、病気の為、口からは食物を食べることができず胃瘻から栄養剤を注入されています。

話すことはできませんが、それなりに状態は安定しておられます。

この文章を改めて入力し、もっと書いて置いて置けばと悔やまれます。

野津 禮子

最初の発病後、あかつき職員寮で暮らして居られる時に、同窓生のお見舞いを受け大喜びの写真です。

